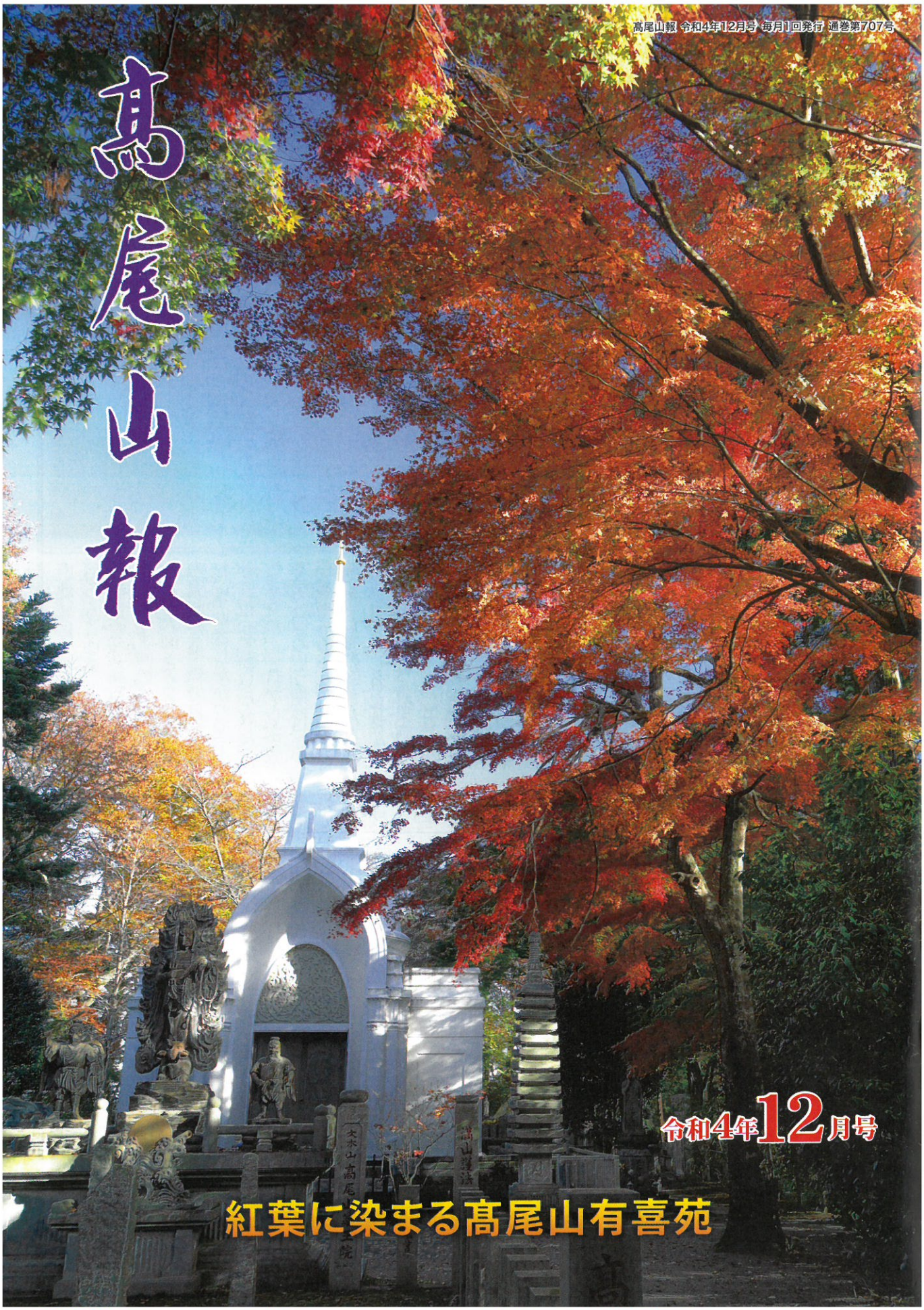
高尾山報 令和4年12月号 毎月1回発行 通巻第707号

高尾山報



令和4年12月号

紅葉に染まる高尾山有喜苑

法の水茎 (126)

大正大学講師　髙橋秀城

十月江南
天気好し
憐れむべし冬の景の
春に似て華しき
ことを

（白居易『白氏文集』）

（十月の江南は好天に恵まれています。味わいましょう、冬の陽射しが春に似て、明るく華やかなことを）

旧暦十月は、現在の新暦では十一月から十二月上旬に当たります。五世紀頃の中国南方（長江中流）の年中行事を記した書物に、

十月は天気和暖
にして
春に似たり、
故に小春と曰ふ

（十月は穏やかで暖かく、春の天候に似ていることから「小春」という）

（『荊楚歳時記』）

と記されているように、「小春」は古くから旧暦十月の異名として用いられてきました。この晩秋から初冬にかけての暖かく穏やかな晴天は「小春日」「小春日和」とも呼ばれ、まるで春先のような光が降り注ぎます。

冒頭の「十月江南」は、『和漢朗詠集』にも採られた有名な漢詩です。「江南」とは、中国の長江（揚子江）下流部の南方地域を指し、台湾の対岸、沖縄の真西に位置する温暖多雨の穀倉地帯で、稲作が盛んな土地柄です。

弘法大師空海（七七四～八三五）は、延暦二十三年（八〇四）に遣唐使船に乗って唐へと向かいました。途中暴風雨に遭い、漂流の末に漂着したのは福州「赤岸鎮」（今の福建省）の海岸でしたが、そこはまさに、この江南地域に当たります。しばらくこの地に滞在し、首都長安へと至ったのは十二月下旬のことでした。お大師さまも、江南の温暖な地域で日を重ね、冬にさしかかって「小春日和」を感じられたでしょうか。これから密教を学べるという期待に心が高鳴りつつも、長安の凍てつく冬の寒さが身に沁みたかもしれません。

先月号では、恵果阿闍梨（七四六～八〇五）が空海に伝法灌頂（すぐれた行者に秘法を授ける儀式）を行ったところまでを読みました。仏教語に「瀉瓶」という言葉がありますが、一つの壺から他の壺へと水を注ぎ移すように、師から愛弟子へと余すところなく真言密教の奥義が伝えられたのです。

その後は、次のような長安の城内での話が記されています。

城の三間の壁に筆跡がありました。破損してからというもの、誰も筆を執って修復しようとしませんでした。

天皇は勅を下して、日本の空海和尚に書かせました。すると、和尚はなんと五カ所に五行を同時に書き始めたのです。それは口に一本をくわえ、両手両足に筆を持った姿でした。天皇はこれを見て心打たれました。

さらに和尚は墨を擦って残り一間の壁面に注ぐと、自然と満ちて「樹」の字になりました。ますます天皇は感嘆し、空海を「五筆和尚」と名づけ、菩提子の念珠を施しました。

またある時、空海が城内の川のほとりにさしかかると、破れた着物をまとった童子が現れました。童子は「日本の五筆和尚か。それなら、この川の上に文字を書いてみよ」と言います。さっそく水の上に清水を讃える詩を書くと、文字は一点も崩れずに流れていきました。童子はこれを見て感歎し微笑みました。

晴れた日には春先のような光が降り注ぐ

童子は「私も書こう。見ていよ」と話すと、水の上に「龍」の字を書きました。しかし文字の右の小点が欠けていて、水面に浮かんだまま流れません。そこで空海が点を付けると、文字は響きを発して光を放ち、龍王となって空に昇りました。実はこの童子は文殊で、破れた着物は瓔珞（珠玉の首飾り）でした。文殊はそのまま姿を消し去りました。

（『今昔物語集』など）

お大師さまは、言わずと知れた書の名人です。

三山懇談会

十月二十六日（水）

左より当山貫首・成田山岸田貫首
川崎大師藤田貫首

去る十月二十六日、真言宗智山派の三大本山である成田山新勝寺、川崎大師平間寺、髙尾山薬王院において、本年成田山及び髙尾山で新貫首が無事に晋山を迎えられたことで、成田山新勝寺・光輪閣に三山の貫首が一堂に会する懇談会が開催されました。

懇談会では、成田山の岸田照泰貫首、川崎大師の藤田隆乗貫首、当山の佐藤貫首が明治二十年に結ばれた三山和合締約を確認され、今後も三山が共に相互理解を深め、友好関係の増進に努めることをお話されました。

浅見家 子育観音法要厳修

十一月三日（木）

同時代を生きた嵯峨天皇（七八六～八四二）、橘逸勢（？～八四二）とともに「三筆」と呼ばれ、「弘法筆を択ばず」「弘法にも筆の誤り」などのことわざも残されています。

ここに語られた逸話も、書に秀でていた超人的な姿を物語ったものです。破損していた城内の筆跡は、「書聖」と崇められる王羲之（三〇七？～三六五？）筆の屏風ともいわれます。お大師さまの書は、王羲之の法に唐代の書家である顔真卿（七〇九～七八五）の書法を加えたものとも評されますが、「五筆和尚」と呼ばれた背景には、単に五本の筆を自在に操ったというだけではなく、こうした先人の書法を会得し、さらに独自の書風を築き上げたという称賛も込められているのではないでしょうか。

また後半の「龍」の字の点（草書の点）を打って真の龍となった話は、その前に空海が清水を讃える詩を書いて川を清めたからこそ「清龍」へと変じて昇龍したのでしょう。

ちなみに、壁面に現れた「樹」の文字と、水面に書いた「龍」の字を合わせると「龍樹」となり、八宗の祖師とされる龍樹菩薩（一五〇～二五〇頃）が思い起こされるのは深読みでしょうか。お大師さまへと連なる師資相承の流れを感じます。

身は花とともに
落つれども、
心は香とともに
飛ぶ。

（空海『性霊集』）

（身体は花とともに消え入ったとしても、心は香りとともに行き渡る）

お大師さまの書が今も手本であるように、その教えもまた現代に息づいています。清らかな心を空に放てば、冬枯れの木立にも小さな春が感じられるかもしれません。

（栃木北部教区普濟寺）

大本山高尾山薬王院
貫首大峯山入峰修行

教務課　主任　五頭覚玄

如来の説法音を表す法螺貝の音が一山に響き渡る

去る九月十二日～十四日、佐藤貫首を峯中大先達に仰ぎ、修験道の聖地奈良県大峯山での入峰修行が執り行われました。

この度の入峰修行は、永年に渡り大峯山での修行をお続けになられている佐藤貫首が、当山派修験道大峯山小笹根本道場へ高尾山晋山のご報告と山内僧侶の新客（しんきゃく）（入峰修行の経験が無い山伏）に対する先達養成を目的として計画され、高尾山主としては昭和三十八年に先々代、山本秀順大僧正が入峰して以来五十九年ぶりの入峰修行となりました。

真言宗醍醐派大本山龍泉寺での護摩修行

修行初日、大峯山麓、洞川（どろがわ）に到着した一行は、先ず真言宗醍醐派大本山龍泉寺に於いて院主様御導師の元、お護摩修行に参拝。院主様からお言葉を賜り、法楽を捧げた後、境内に湧き出る池に於いて水行を行い、身を浄めて翌日の入峰修行に備えました。

当山派修験道小笹根本道場にて

鐘掛け岩の断崖絶壁をよじ登る

翌未明、宿での法楽の後、山上へ向けて発足。夜明け前の暗闇の霊山に一行の唱える六根清浄の掛け念仏の声が響き渡り、一歩一歩丁寧に歩みを進め、途中の各行場では佐藤貫首より、いわれや修行に対する心構えのお話しを頂きました。ご自身の経験から滲み出るお言葉の一つ一つに新客は疲れを忘れ、真剣に耳を傾け深く頷いていました。山上大峯山寺での法楽を済ませ、一行はさらに尾根を進み当山派修験道の聖地、小笹根本道場へと向かいました。小笹根本道場とは大峯山中興の祖、聖宝理源大師が神変大菩薩より霊気誘導を受け、龍樹菩薩の浄土に導かれて秘伝の法流を直伝された峯中灌頂道場であります。それぞれの思いを祈りに込めて懇ろに法楽を奉げた後、下山の途に就きました。

報恩謝徳の祈りを込めて
法螺の音を立てる佐藤貫首

険しい道を慎重に進む
佐藤貫首と深田執事

大峯山入峰修行を無魔成満した一行は、最終日、高野山へ向かい、来年、御誕生壱千二百五十年をお迎えになる弘法大師様おわせます奥の院へ参拝致しました。その後、高野山別格本山持明院様に於いて精進料理の御接待を受け、入峰修行の余韻に浸りながら一路帰山致しました。

断崖絶壁に釣り下げられる西の覗き行場

この度の入峰修行に於いて、佐藤貫首が自ら六根清浄を唱え、法螺の音を立てながら入峰修行を歩まれる道中で様々な事を教わりました。特に、「今、こうして修行に出かけてこれるのも、全てのご縁が整った賜物（たまもの）である。快く留守を引き受けて頂いた職場の同僚や家族。道案内をしてくれた先達。修行の道を整備してくださった地元の方々。御給仕をして下さった宿の方々。そして何より自らの健康、そして生命を与えて下さった両親。全てのお蔭の賜物により修行させて頂いている。よくよく隅々まで感謝の気持ちを持つように。」、「大峯山の修行は、お山を降りてきたところから始まる。いわば実生活そのものが入峰修行であり、日々の精進の積み重ねによって、又お山に入る事が叶う。何事も修行と思う事が大事である。」というお言葉が胸の中に深く響きました。本修行の成果を人格に顕せるように今後とも精進してまいる所存です。

合掌

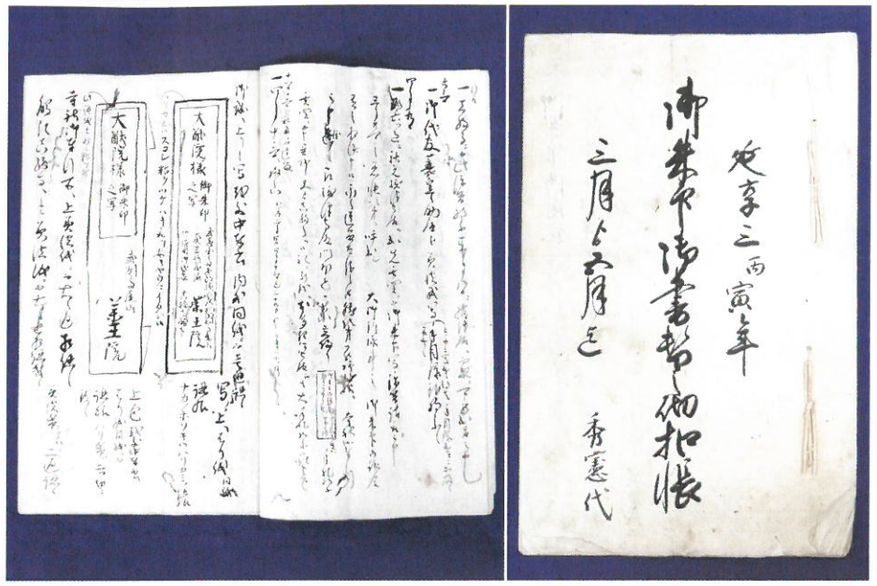
鎖を伝って登る油こぼしの行場

高尾山年代記 36

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

十六世秀憲4　寺領朱印状改め



寺領朱印状改めの経緯を記した記録（法政大学多摩図書館寄託）

延享二年（一七四五）秋、八代将軍徳川吉宗が引退し、長子家重に将軍職を譲った。その治世は諸制度の整備、能吏の登用、新田開発による農業生産力向上と年貢増収など、政権基盤の安定を見た。その後、吉宗政権後期の年貢増徴策が農村に疲弊をもたらしてゆく一方、貨幣経済の進展による商業・流通の活性化が政治・社会のあり方を変えてゆくことになる。

寺領朱印状改め

新たな将軍の就任にあたっては、その主従の関係を再確認する儀礼をともない、薬王院もまた無関係ではなかった。まずは代替りの御礼がおこなわれ諸大名以下、一定の格式を有する諸国の寺社に至るまで、江戸城に登城して新将軍に拝謁した。そして、主従関係の裏付けである所領の安堵を受ける。すなわち、大名・寺社の存立は、徳川将軍個人との関係に発しているという考え方があり、前の将軍と結んでいた関係をあらためて結び直すという意味から、領地を保証する朱印状[註1]の再発行がおこなわれる。山主秀憲が朱印状改めのため江戸に出府した際の詳細な記録が残り、その一挙手一投足が知れる貴重な史料なので、その一部始終を追ってみたい。

家重就任時の朱印状改めの記録には、「延享三丙寅年三月より五月まで　御朱印御書替之砌控帳」と「延享三丙寅年三月　御朱印御改出府記録」という二冊がある。なぜ同様の書冊が二通り作成されたかは定かでない。筆跡が若干異なるので別人がまとめたか、記事の日付と人名に若干の異同があることからも、どちらかは延享三年時点から少し間をおいて作成された可能性がある。前者は行間に補足の書き込みが多くあることから、出府時に近い時期の作成と考え得る。一方、後者は前者に比べて記事が整然としており、後年まとめられた感もあるが、時期の前後を断定する確証とまではゆかない。ここでは、「控帳」の記載を基に筆を進め、「記録」で適宜記事を補うこととしたい。

朱印状改めの出府

延享二年の暮れも押し詰まった閏十二月、江戸四箇寺（触頭）[註2]から朱印状改めについての通達が届いた。それに従い、秀憲は翌年三月四日に江戸へ出府、旅宿を鎌倉町（千代田区内神田）に取った。翌日に触頭真福寺へ出向くが触頭会合のため留守、挨拶は次の日となる。八日あらためて真福寺にて朱印状写しの点検を受け、改めを願い出る添え状を受け取った。その翌日は残りの三ヶ寺へ挨拶に回る。一〇日、朱印状改めを受け付ける「着帳」のため奉行宅へ出向こうとするも、その日は着帳を受け付けないと聞いて旅宿に待機。翌日からこの

着帳のために大いに苦労することになる。なお、寺社奉行所は、寺社奉行に在職している大名の屋敷ということになる。寺社奉行本多紀伊守正珍宅、御朱印奉行秋元摂津守涼朝宅とも皇居外苑の東側辺りにあった。

一二日、本多宅を訪れると、取次の役人から二、三日中に再訪するよう申し渡される。秋元宅でも同じく二、三日中の再訪を申し渡された。一三日に再訪するも同じ対応。一四日は雨だったが、明六ツ時（午前四時半頃）出頭した本多宅ではまたも二、三日中の再訪を言い渡される。秋元宅へ行ってみると、着帳が始まっていたようだが「大勢詰めかけ内へ入れ申さず、帰りそうろう」。

三月一七日は混み合うことを見越してまだ暗い夜七ツ時に秋元宅を訪れた。明六ツ過ぎに開門するがすぐには内に入れず、ようやく四ツ（午前九時半頃）過ぎに入れたが、結局この日は着帳できず。二〇日にかけて本多・秋元宅を訪れ早朝から夕方まで順番を待ったが、訪れる寺院が大勢で着帳ならず、「大きに難儀申しそうろう」と書面に記されることになる。

二一日も明六ツ頃に秋元宅へ。昼八ツ過ぎ（午後二時頃）、ようやく着帳することができた。寺領朱印状の目録と触頭からの添え状を提示し、四月九日朝六ツ半時秋元宅へ出頭するようにとの書面を受け取った。翌二二日には本多と触頭真福寺へ着帳の報告をしている。

四月九日、改めの当日。明六ツ過ぎに旅宿を出発、間もなく秋元宅へ到着すると、玄関にて朱印状の写しと添え状、着帳時の書面を提出。しばし詰所に待機の後、二一日の着帳の順に呼び出しを受け、秋元・本多と儒者、祐筆ら列座の中、朱印状の読み合わせがおこなわれた。それが済むと、本多から長々の逗留大儀であったと慰労の言葉があった。その日の内に本多宅へ改めの済んだ旨の書面を提出、真福寺にも報告し、ようやく「大儀」な勤めが終了した。二日間私用で逗留の後、四月二三日に帰山している。なお、朱印状の発給自体は翌年の八月ということになる。

「控帳」の記述

「控帳」には朱印状改めについて事細かく手順が記されている。例えば、朱印状の写しの作成方法。紙は将軍まで上がるものは越前奉書紙、寺社奉行・触頭には美濃紙を使用するとある。越前奉書紙は越前和紙（福井県）の、楮皮の芯の白い部分のみ使って漉き上げた厚手の最高級紙である。「美濃」というのは、美濃和紙（岐阜県）というより「美濃判（おおよそA3）」という規格のことと考えられる。包紙には「大猷院様（家光）」というように誰の朱印状かを明記した張り紙を貼るが、「少し糊をつけはぎ取り易きようにいたし」と事細かい（写真のページ）。代々の朱印状の目録は中奉書半切に書き、美濃紙にて上包みと、紙の種類と規格も決められていた。書写の仕方も朱印部分は「ブン廻シにて御判の大きさを取り、少しも大小これ無きよう」年月の表示との位置関係もその通りにとある。「ブン廻シ」とは印形の丸を描くための、今で言うコンパスである。文字は朱印状に書かれた通り墨の濃淡など少しの違いもなく、文字列が紙の折り目にかかるところはその通りにとあり、写しというより複製品に近い。

末尾には「私意」とあるので秀憲自身の所見ということなのだろう。御触れでは三ヵ月の内に出頭せよとあるので、皆早くしようと最初の月に出府するが、奉行所も取り込みとなり着帳が心安く成りがたい。最初の月の終わりか中の月の初め頃に行けば、近国の寺社はたいてい着帳が済んでいるので心安く着帳できる。あまり遅く出頭するのは手順が疎略になるので宜しくない、としている。秀憲は以前に秀永が作成していた享保二年（一七一七）の記録に目を通していたに違いないが、そこには着帳の大変なことまでは記されていなかった。後々の事を考え、細かく対応のノウハウと注意事項を書き記した、秀憲の几帳面な性格がうかがえる。

註1　将軍の名で発給される文書には朱印が押印された。

註2　寺社奉行の配下として寺社行政を司る愛宕真福寺ほか三ヶ寺のこと。「御触」を発する立場なので「触頭」と称される。

おことわり　本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

宗祖弘法大師ご誕生 千二百五十年記念慶讃法要

（東京ブロック理趣三昧法要）厳修

十月二十三日（日）　於・総本山　智積院

十月二十三日、真言宗智山派総本山智積院において、宗祖弘法大師ご誕生千二百五十年を記念して、慶讃法要が執行されました。

法要はブロック毎に約一か月間かけて行われ、この日は東京都と神奈川県、山梨県寺院で構成される東京ブロックにより営まれ、大本山川崎大師平間寺藤田隆乗貫首御導師のもと厳修され、当山の佐藤貫首も随喜致しました。

川崎大師藤田貫首（前列中央）
当山貫首（前列右から二人目）をはじめ
多くの諸大徳が参列されました

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「お元気ですか」

八王子市　栃谷玲子 様

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

十一段　耐え忍び我慢することで実力が付く

何事にも努力は大切なものです。ずっと努力し続けることは難しいもので、飽きたり、成功までの長い道程を悩み、諦めてしまうかもしれません。苦しいかもしれませんが、結果が出るまでは我慢して継続してみましょう。

高尾山季節散歩

暦の言葉「七十二候」
雪下出麦
「ゆきわたりてむぎのびる」

十二月二日～十二月六日頃

雪が降り積もるこの頃には麦が芽吹く。秋に種蒔きされた麦は年をまたいで、翌年の初夏に収穫される。

この時期に麦の芽を足で踏む「麦踏み」は霜害を防ぐとともに、根の張りを強靭にする効果がある。

今月の風物詩
年賀状

新年を祝う挨拶状のことで、多くの場合、郵便葉書が用いられる。新年を祝う言葉をもって挨拶し、前年への友好の感謝と、新年の変わらぬ関係を願う。

最近ではメールやSNSなど、葉書以外の方法で連絡をとることも多いようですが、たまには手書きで年賀状を出してみてはいかがでしょうか。

いけばなの心 ㉞

華道教授　佐藤　宗明

今月ご紹介する作品は、三種類の花材を使用した生花正風体の作品です。生花は植物が放つ生命の美しさを表現するものですが、三種生は複数の花材を取り合わせることで、それぞれの植物の良いところを融合させた美しさを見せることができます。

まっすぐにスラっと伸びるボケの枝が魅力的に感じたので、それを生かせないかと思ったのが作品制作のきっかけです。

ボケの赤い花をより鮮やかに見せるために青い花器を選んでいます。そのままですと、季節感が足りないように感じましたので、少し黄色くなったオクロレウカの葉と、黄色い小菊を添えて作品を整えました。

秋から冬に向かう風情の中にも花を咲かせる草木の力強さを感じて頂けると嬉しいです。

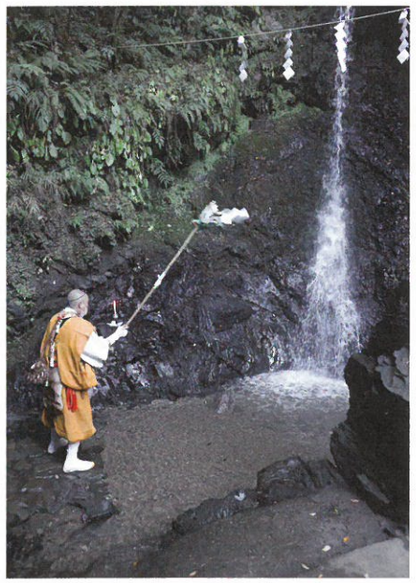
このコーナーも令和二年から掲載させて頂いております。おかげさまで今年も毎月作品を紹介させて頂く事ができました。また来年もいけばなの魅力をお伝えできればと思います。皆様良いお年をお迎えください。

花材：ボケ、オクロレウカ、小菊

閉瀑式厳修

十月三十一日（月）

高尾山には、蛇滝及び琵琶滝という滝行を行う水行道場があり、毎年十月三十一日には両道場において、一年間安全に修行できたことを感謝する、閉瀑式が行われております。



琵琶滝（左）と蛇滝（右）で行われた閉瀑式

観音菩薩の宗教 ⑥0

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

海の守護神たる観音菩薩と住吉明神

前回に続き、今回は海難の守護神としての住吉明神と観音菩薩について、空海の信仰とともに考察する。

『万葉集』四二四五「入唐使に贈る歌」には住吉明神が海難を防ぐ神として尊崇されていることがうたわれている。原文と先学による大意を続けて引用する。

「そらみつ大和の國あをによし平城の都ゆ押し照る難波に下り住吉の御津に船乗り直渡り日の入る國に遣はさるわが背の君を懸けまくのゆゆし畏き住吉のわが大御神船の舳に領き坐し船艫に御立いましてさし寄らむ礒の崎崎漕ぎ泊てむ泊泊に荒き風波に遇はせず平けく率て歸りませ本の國家に」（高木市之助・五味智英・大野晋「校注」『萬葉集四』日本古典文学体系7、岩波書店、一九六二年、三六七頁）

元禄期『佛像圖彙』に三十番神の一尊として描かれた住吉大明神（https://www.onmarkproductions.com/html/30-kami-of-the-month.html）

「大和の国の奈良の都から難波に下り、住吉の御津で船に乗り、まっすぐに日の入る国、大唐に遣わされるわが背の君を、申すも畏れ多い住吉の大御神が、舳先においでになり、船尾にお立ちになられて、立ち寄る磯の崎、漕いで停泊する泊りごとに、荒い風や波にあわせず平安につれてお帰り下さい、もとの国へと」（小島憲之・木下正俊・佐竹昭広「校注・訳」『萬葉集四』日本古典文学全集5、小学館、一九七五年、三四〇～三四二頁）

また、弘法大師が感得した高貴徳王菩薩は住吉明神の本地とされる。さらに大師は聖徳太子の後身で、聖徳太子は観音菩薩の転生であるから、住吉明神と観音菩薩も結びついていく。本地垂迹思想では住吉明神は聖観音を本地とするとも信ぜられ、元禄三年（一六九〇）の土佐秀信による『佛像圖彙』では聖観音を示す種字「𑖮（サ）」とともに住吉大明神の姿が描かれ、「本地正観音」と明示されている。

教理的観点から考察すると、『観音経』は観音菩薩による七難からの救済を説き、水難からの救いはその二番目に挙げられている。「或漂流巨海龍魚諸鬼難　念彼観音力　波浪不能没（あるいは大海を漂流して、龍や魚や種々の鬼に襲われても、彼の観音の力を念ずれば、波に沈むこともない）」とあるのがそれである（拙稿「観音菩薩の宗教⑦」）。その功徳は水難救助の神である住吉明神と共通する。住吉明神の本地を観音菩薩とする一根拠もそこに見出されよう。水難の中、命を賭しての入唐で大師が住吉明神と観音菩薩に祈願したとしても、不思議ではない。

弘法大師の航海を観音菩薩が守護したとする伝承は、高野山龍光院所蔵の絵画「伝船中湧現観音像」（平安時代末、国宝）に見られる。高野山中興とされた真言僧の明算（一〇二一～一一〇六）は、この絵画について『紀伊続風土記』（第四輯高野山之部巻十六）に「観音絵像一軸、大師筆御入唐の時船中影現の図なり」と記している（真鍋俊照「入唐と船中湧現の図像」『印度學仏教學研究』24巻2号、一九七六年）。ここにある「影現」とは仏菩薩が姿を現すことで、弘法大師が唐に渡る際の船中に観音菩薩が出現したもうたことを述べている。一方、守覚『北院御室拾要集』には「大師御帰朝船中ニ観音顕現シ、忽然トシテ五色ノ雲上ニ還リ去ル、云々、其ノ出現ノ形相ハ聖観音ノ剣印ヲ結

ブ是ナリ」（原漢文を金岡が書き下し）とあり（真鍋、前掲論文）、唐より帰朝する際の船中に観音菩薩が現れた後、忽然として五色の雲の上に還っていったと記されている。また、その観音菩薩は聖観音で手に剣を意味する「剣印」の印相を結んでいるという。

弘法大師自身の著作には船中湧現の記述が見られず、また『弘法大師行状絵詞』など後世の資料でも、大師の「入唐帰願」は宇佐八幡、賀春明神、白檀薬師如来、筑紫八幡大菩薩などで観音菩薩は登場しない（真鍋、前掲論文）。もっともよく知られた伝承でも、航海の船中で大師を救ったのは後に波切不動尊と呼ばれた不動明王である（高野山南院蔵、重要文化財）。波切不動尊は、大師が唐の長安に滞在中、恵果阿闍梨より与えられた木材を大師自ら彫刻した三尺二寸（重文登録では 86.2cm）の像で、高野山の寺伝によれば帰朝の船が難破しそうになった時、その不動尊が剣を振るって波を静めたとされる。旧約聖書に詳しい人にはモーセの「海割り」の奇跡を髣髴させるかも知れない。大師の波切不動尊の像は平将門の乱や蒙古襲来の折りなど、各地に奉安され祈念され、広くその功徳が知られるようになった（渡辺照宏『不動明王』朝日選書、一九七五年、四五頁など）。そのため、言語資料ではないが、「伝船中湧現観音像」は航海における観音菩薩の功徳と弘法大師との関係を示す貴重な資料といえる。

船中に祀った観音像の力により無事に祖国に帰還できた話は『日本霊異記』（上巻、第十七）と『今昔物語集』（巻十六、第二）に見える。両者は同じ話を伝えており、ここではより古い記述と考えられる前者から原文「兵災ニ遭ヒ観音菩薩像ヲ信敬シ現報ヲ得ル縁　第十七」の書き下し文を示す。

「伊豫の國越智の郡の大領の先祖越智直、百濟を救はむとするに當りて、遣されて軍に到りし時、唐兵に擒はれ、其の唐國に至る。我が八人、同じく一つの洲に住む。儻トシテ観音菩薩の像を得て、信敬尊重す。八人心を同じくし、竊に松の木を截リテ一つの舟を爲り、其の像を請け奉りて、舟の上に安置し、各請願を立て、彼の観音を念ず。爰に西の風に隨ひて、直に筑紫に來る。朝庭聞し召して、事の狀を問ふ。天皇忽に矜びて、樂ふ所を申さ令む。是に越智言はく『郡を立てて仕へむと欲ふ』といふ。天皇許可したまふ。然して後に郡を建て寺を造り、即ち其の像を置けり。時より今の世に迄り、子孫相續ぎて歸敬す。蓋し是れ観音の力、信心の至りなり。（後略）」（『日本霊異記』日本古典文学体系70、岩波書店、一九六七年、一一～一一三頁。原漢文）

以下、多くの日本古典を研究した中田祝夫による現代語訳を引用する。

「伊予の国越智郡の郡長の先祖に当たる越智直という人は、百済の国を救うため派遣され、各地を巡った時、唐の軍に追いつめられ、捕虜となって、唐の国まで連れて行かれた。わが日本国の人八人が同じくつかまって一つの島に住むことになった。一同は協力して観音菩薩の像を手に入れ、これを信仰しあがめ奉っていた。八人は心を一つにして、ひそかに、松の木を伐って一隻の舟を作った。そして観音像をお迎えして舟中に安置し、各人がそれぞれ請願を立て、本国へ無事帰還できるよう観音像に祈念した。すると、西風が吹き出し、この風にのって一直線に筑紫に到着した。朝廷ではこのことを聞かれて、召し出して事の次第をお尋ねになった。天皇はすぐに哀れに思われて、望むところを言上させた。そこで越智直は、『新しく一郡を設けていただき、ここに観音様を安置し、お仕えしたく存じます』と申し出た。天皇はこれをお許しくださった。そこで新しく越智という郡を設け、寺を建て、観音像を安置することになった。その時以来今に至るまで、越智直の子孫が相ついでこの像を敬い帰依し奉っている。思うにこれは観音のご利益とこれを信心した結果によるものと思う」（中田祝夫「校注・訳」『日本霊異記』日本古典文学全集6、小学館、一九七五年、九七～九八頁）。

付言すると、「郡を立てて仕へむと欲ふ」は『今昔物語』では「當國ニ二ノ郡ヲ立テゝ堂ヲ造テ此ノ観音ノ像ヲ安置シ奉ラム」とあり「堂」の字が加えられている（池上洵一「校注」『今昔物語集(三)』新日本古典文学体系35、岩波書店、一九九三年、四七一頁）。

高尾小物語 終

霊気満山

絵・橋本豊治

日本遺産

魅力ある有形・無形の文化財や、地域の歴史的特色を通じて構成されたストーリーを文化庁が認定し、地域の活性化を図ることを目的とする。現在では全国で百四か所が認定されております。

令和二年六月、八王子市は「霊気満山　高尾山～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～」というストーリーで、都内唯一となる日本遺産に認定されました。

江戸時代には絹産業で発展し、桑都と称された八王子には様々な伝統文化が今でも残されております。西川古柳座の八王子車人形や八王子消防記念会の木遣唄、また花街の八王子芸妓衆など、高尾山の年中行事においても欠かせない存在です。

今なお高尾山には、年間を通して大勢の方が登山されます。目的は様々で、お参りであったり、ハイキングのためであったり、運動のためであったりします。

「霊気満山」の言葉通り、生命が満ち溢れている高尾山に訪れた方々が、そうした「生きる力」を心身に取り込むことで、日々の疲れや悩みが少しでも和らぎ、人生や生活への活力となれるよう願っております。

いろは天狗の落し文 ㉓

む

無理に自分の
器大きく
見せずともよし
そのままで

つい気が大きくなり、出来もしないことをやって失敗した経験はありませんか。どんな人でもつい見栄を張ってしまう時があるものです。人間は多かれ少なかれ見栄を張るものなので、見栄を完全に捨てることができる人は滅多にいないことでしょう。

もちろん、自信をもって挑戦し続ける心は必要なことですが、自分の実力を過信する事とは違います。目標を作る時には、現在の万全な状態がこれからも続いているとは限らない、そのことを忘れてはいけません。今自分にできることを積み上げる、身の丈に合った継続的な目標設定を行うことが大切です。

長期的目標を達成するために、短期的目標を達成して少しずつ前に進む、このことこそが成功への道筋かもしれません。

おはなし散歩道

りんちゃんの年の瀬

湯沢町　富樫　あい子

越後魚沼の米どころに昔ながらの年の瀬を迎えている爺がいる。

ひ孫のりんは四年生。年末には家族も来て、そろって正月を迎える。

りんは、冬休みに入ると一人で東京から来た。

爺はいろりに大きな鍋を掛けて豆を煮ていた。

「こんなにいっぱい煮てどうするの？」

寡黙な爺は、ニコッとしてりんを見て、いろりに薪をくべた。爺が一言。

「これから、すす逃げだ。外へ遊びに行け！」

「？　手伝いに来たのに」

つまらなそうに外に出た。いつも閉まっている前庭の土蔵が開いていた。

天窓の灯しかない蔵にりんは、初めて入った。

土間には古い農機具や米袋が積んである。

奥に行くと昔のタンスや食器棚、膳と書かれた箱や整理された書類箱を珍しそうに眺めていた。

りんちゃん！　足元で呼ぶ声に、あたりを見た。

「怖い！　バケネコ！」

と飛び上がった。

「ネコじゃないよ。おれチュウ助、蔵の番人さ！」

ネコほど大きいネズミに、りんは驚いた。

「幸助爺は、もう少しで百歳だ。昔から正月のしきたりを守っている人だ。すす逃げと言われたな？」

といい、りんを見上げた。

「うん」

「大掃除は、男の仕事でな。すすやほこりが落ちて来るので女子どもは親戚や隣近所に行って、掃除が終わった頃帰るのだ」

すす払いから逃げるので、すす逃げという。

「その日は白いご飯を炊いて、御馳走が食べられると子ども達は喜んだ」

懐かしそうにチュウ助が話した。すると急に！

「おやつだ。受け取れよ」

チュウ助は、軒を伝って干し柿の紐をかじった。それを見上げていたりんの顔に干し柿が命中した。

「ぎゃ～　痛った～い」

「アハハ、下手だなぁ」

リンはいつしかチュウ助と親しくなっていた。

母屋に帰ると、いろりに炭が赤々と燃えて家の中は明るく綺麗になっていた。正月が来たようだ。

「りんちゃん、明日は納豆を作る日だ。たのむよ」

「はい」

爺は大鍋の豆を指で潰すと「よし」と頷いた。

「チュウ助に持って行け」

爺は椀に煮た豆を入れ、りんに渡した。

「チュウ助、爺からだよ」

「煮豆か？　ありがとう」

「明日は納豆五日だな」

「何？　それ？」

正月に食べる納豆を作る日だという。

翌朝、りんが起きると、爺はワラでツトコ（煮た豆を入れて発酵させる物）を作っていた。爺は言う。

「ツトコに煮た豆をしゃもじ一杯入れてくれ」

「はい」りんはようやく手伝いができると喜んだ。

「毎年、送ってくれた納豆もこうして作ったのね。粘って美味しかった」

「そうか、昔、納豆は正月しか食べなかったっぺ」

そこにチュウ助が来た。

「大晦日の日は蔵にも御馳走を運んでネズミにも年取りさせてくれるんだ」と爺に感謝していた。

爺はりんが作ったツトコをムシロに包んでいろりに吊り下げた。

「大晦日にはムシロを開けて納豆の包みを出し、塩をまぶして食べるっぺ」

大晦日の御馳走の一つだ。今年の納豆はりんが手伝ったので一段と美味しかろう。爺は目を細め、笑みを浮かべた。

「あっ、雪だ！」

りんが窓を見て叫んだ。

「明日は山に行って正月飾りの材料集めなんだが」

爺は外を眺めて言った。

「門松作るの？」

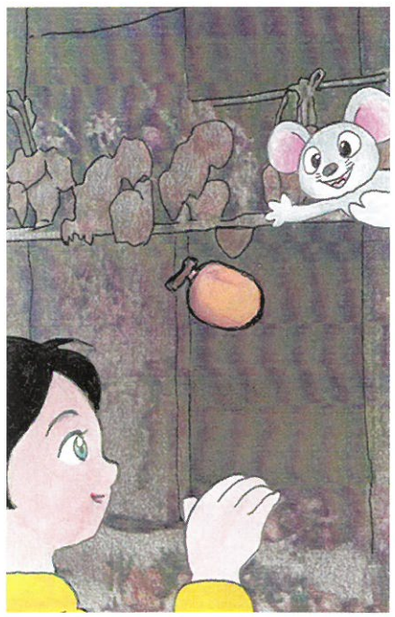
「松は飾らん！　越後は上杉謙信さまだ。わしは上杉幸助。杉なのだ！」

爺は急に胸を張って、

「杉で正月様を迎える！」

りんは、杉にこだわる爺が頼もしく思えた。

（子ども風土記）



（挿し絵・小出　茂）

令和五年 新春初詣の御護摩修行の流れとお願い

当山の感染防止対策について

当山では昨年に引き続き各種感染防止対策を実施致します。

【感染防止の基本】
- 大本堂、各部署は常時換気の徹底。
- 境内各所の定期巡回及び、消毒を実施。
- 消毒液の設置（手指の消毒にご協力をお願いします）。
- 自宅での検温とマスク着用の徹底をお願いします。
- 体調が優れない時にはお詣りをお控え下さい。

【大本堂内での対策】
- 靴袋をご持参下さい。
- 堂内での私語はお控え下さい。
- 堂内への入場は定員の半分程度までと制限します。

【坊入りについて】
- 例年、七日まで行っている新年の御挨拶（おとそ膳）は本年も中止と致します。

【御護摩受付所・信徒休憩所】
- 信徒休憩所は閉鎖となり、ご利用頂けません。
- 御朱印及び健康登山押印は御護摩受付所にて授与致します。

※御参拝できない方には郵送や宅配にて、御護摩札、縁起物、御守りを授与致しますので、15Pの下段記事をご参照下さい。

御信徒の皆様にはご不便をお掛け致しますが、何卒御理解と御協力の程、宜しくお願い申し上げます。
御質問等ございましたら左記までお問い合わせ下さい。
尚、今後の感染状況により、対策等が変更になる場合があります。

大本山　高尾山薬王院　信徒部　TEL〇四二-六六一-一一一五

新たな年の安寧を祈る

正月限定　新春特別祈祷札

令和五年も正月期間（一月一日～一月三十一日）限定で「令和新春特別祈祷札」を授与致します。

近年は自然災害や疫病の流行等、様々な災厄が頻発する時代であります。しかしながら、年が改まり心機一転する正月を迎えるにあたり、種々の災いが少ない、明るい一年となるようにと、特に御祈願申し上げる次第であります。御信徒の皆様方におかれましては、この機会に是非御来山を頂き、新たな年の安寧を共にお祈り下さいますようお勧めいたします。

ご祈祷料は一体**三萬円**となります。

願意（お願い事）は「**除災開運**」のみとなります。

御来山当日でのお申込みも可能ですが、正月期間の御護摩受付所は混雑が予想されるため、事前にお申し込みも頂けます。また、御信徒様各位の御都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に宅配でのお取り扱いもいたしておりますので、ご希望の方は下段の記事をご参照下さい。

御護摩札及び御守等　郵送・宅配申込方法について

当山では、通年を通して遠方の御信徒様や、高尾山へ直接御参拝することが難しい方々の為に、御護摩札をはじめ各種御守等を、郵送及び宅配にてお受けしております。

お正月御護摩札のお申し込みにつきましても同様に、お手紙やFAX、または「高尾山公式ホームページ」内の「御護摩札　郵送申し込み」からインターネットにて承っておりますので、ぜひご利用頂きますようお願い申し上げます。

また、各種御守りをはじめ、天狗団扇や熊手等のお正月限定の縁起物をご希望の際には、専用のお申込書を郵送またはFAXにてお送り致しますのでご連絡下さい。

お問い合わせ先の電話番号、FAX番号につきましては左記の通りとなりますが、ホームページのアドレス及びQRコードにつきましては、二十ページ下段に記載されておりますので、そちらをご参照下さい。

TEL　〇四二-六六一-一一一五
FAX　〇四二-六六四-一一九九

お電話やFAXにてご連絡を頂く際には、次のように郵送御護摩係か札場係までお願いします。

1　御護摩札のみ
2　御護摩札及び御守　）郵送御護摩係まで
3　御守のみ　札場係まで

令和五年　癸卯（みずのとう）
高尾山節分会追儺式参加申込の御案内

二月三日（金）

歳男・歳女　修行時間

第一回	午前七時半
第二回	午前九時
第三回	午前十時半
第四回	正午
第五回	午後一時半
第六回	午後二時半

尚、修行時間の三十分前、もしくは、定員になり次第受付を締め切らせていただきます。もし時間に間に合わない場合は次回の修行時間にお入り頂きますので、何卒、ご了承下さいませ。

高尾山恒例の節分会（豆まき式）を、二月三日、身上安全、事業繁栄、諸縁吉祥、除災開運等の祈願をこめて開催致します。

御信徒の皆様には、歳男・歳女に参加されますよう御案内申し上げます。

冥加料（祈祷料）三万円

お問い合わせ　高尾山節分会係
電話〇四二（六六一）一一一五

高尾山の昆虫
クロナガオサムシ

158

高尾山の表参道や自然研究路を歩いていると、地表を横切る多種のオサムシの仲間に出会います。

その中にあって大型で光沢を欠くオサムシが、クロナガオサムシ（黒長歩行虫）です。オサムシの「オサ」の由縁は、昔の機織りの道具である筬であるとしたり、体が長いので長の字を充てた、という説も根強いです。

甲虫であるオサムシは、堅い上翅で覆われていますが、クロナガオサの上翅はジョウカイボンのように柔らかく強く掴むと、変形してしまう程です。

本種はその名のように艶消しの黒色で長細く、上翅に隆起した縦線が鎖状に並び、他種に比べるとやや地味な印象がありますが、存在感はあります。

ところが最近。めっきり見かけることが少なくなりました。これは高尾山に圏央道のトンネルが掘られ、乾燥化が進んだことによると指摘されることが多いようです。

オサムシは全体に減少した印象があり、特にクロナガオサは顕著のようですが、私の杞憂であってあの渋い姿を復活させて、健在ぶりをアピールして欲しいと願っています。

（撮影・文　松島　孝）

高尾山火渡り祭
柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

（令和五年三月十二日　日曜日）

当山では毎年三月第二日曜日に春を招く恒例行事として、祈祷殿火渡り本尊ご寶前にて、高尾山修験道による火渡り祭が盛大に執り行われます。

火渡り祭とは、高尾山主大導師のもと、全国各地の霊山で修行を重ねた山伏が、一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈祷法要であります。

この浄行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて供される、御本尊・飯縄大権現様の功徳を顕す御壇木のご志納を一本一万円にて募っております。

ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大いなるご信助を賜りますよう、謹んでお願いを申し上げる次第でございます。

尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院参道に一年間掲示致します。御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒部までお問い合わせ下さい。

電　話　〇四二-六六一-二一一五
FAX　〇四二-六六四-二九九
大本山　高尾山薬王院　信徒部

祈大願成就　身体健全
高尾　登

※今後、新型コロナウイルス感染症の流行状況等により、実施内容が急遽変更となる場合がありますことを、御承知おき下さい。

百観音霊場巡礼 (31)

厚木市　荒井　一雄

冬遊岩殿山安楽寺

冬、岩殿山安楽寺に遊ぶ
凍てつく風が皮膚や胸襟を刺す…
九十九歳の老人は
聖観世音大菩薩様を深く拝す…
仏像彫刻は千年の『色即是空』…
戦友の追善菩提を
観音様に請ひ願ふ…

岩殿に
まひらばたれも安楽し
ならばたれそれ参り祈らん

凍風刺膚射胸襟
老翁深拜聖観音
仏像雕刻千歳空
英霊菩提願観音

迎光祭のお知らせ

令和五年元旦の迎光祭につきましては、令和四年に引き続き、薬王院の境内地に祈願所を設けて実施致します。

迎光祭とは薬王院の伝統的儀式を組み込んだ、初日の出を迎える行事で、僧侶の読経や山伏の法螺により、参列者の無病息災など一年間の安全を祈願して、新年を祝います。

大晦日から元日にかけて終夜でケーブルカーの運行が行われる予定です。晴れていれば、横浜方面から昇るご来光を拝すことが出来ます。

御護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行をお勤めしております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、御供物と共に清浄な場所に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納する習慣があります。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には、杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ共存共栄し、今日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年**十二月十日**までに、**一万円以上**を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

高尾山薬王院の御護摩札

(大)	10,000円
(中)	5,000円
(小)	3,000円
お護摩	3,000円以上
お護摩	5,000円以上
お護摩	10,000円以上
特別大護摩	30,000円以上
開帳大護摩	50,000円以上
特別開帳大護摩	100,000円以上

お護摩の願事

お願い事は一体一願意とします。

併願(二願意)は一万円より受け賜ります。

但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせて頂きます。

お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

(　)内の略体をお書き下さい

- 家内安全(家)
- 商業繁昌(商)
- 事業繁栄(事)
- 交通安全 車内用札(車・交)
- 交通安全 神棚用木札(木・交)
- 身上安全(身)
- 災難消除(災)
- 厄除(厄)
- 身体健全(体)
- 当病平愈(病)
- 開運(開)
- 良縁成就(縁)
- 安産成就(安)
- 入学成就(入)
- 心願成就(心)
- 御礼(礼)
- 奉納杉苗(杉)

高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

富里市　森　照森
草加市　峯尾　好生
多摩市　古屋　浩之
札幌市　阿部　フミ子
葛飾区　高田　勝弘
大田区　田中　良典
府中市　井上　瑞穂
相模原市　小野沢　波枝
東久留米市　吉岡　智代
八王子市　大山　泰
立川市　熊添　圭子
港区　中川　兼造
練馬区　深谷　薫
八王子市　天野　章雄
海老名市　山崎　俊裕
八王子市　池浦　國秋
相模原市　磯部　司郎
府中市　菊池　健
船橋市　櫛田　幹夫
横浜市　白石　京子
小平市　関　道雄
横浜市　佐藤　文一
千代田区　工藤　好子
葛飾区　高橋　キミ子
八王子市　秋山　誠
葛飾区　増渕　ミヨ
新座市　彰山　粧麗
いわき市　新藤　孝弘
吉川市　飯島　和子
足利市　加藤　清美
真岡市　小暮　周平
大里郡　深田　節子
入間市　垣沼　ひとみ
小山市　中村　宣晴
邑楽郡　八山　光三郎
羽生市　宮崎　幸子
松本市　後藤　和一郎
久慈郡　早乙女　和江
高崎市　中山　晃雄
児玉郡　植井　実
高崎市　織田　早苗
深谷市　木村　豊藤
熊谷市　小林　琴枝
松本市　寺澤　和男
館林市　三宅　正基
小諸市　金子　滋
前橋市　吉野　政治
熊谷市　大崎　正一
前橋市　小池　武夫
〃　小林　洋右
鹿沼市　荒川　昭巳
足利市　荻野　キヨ
太田市　高野　さき子
吾妻郡　湯本　美和子
伊勢崎市　佐々木　晋介
世田谷区　近藤　徹
八王子市　菱山　愛子
相模原市　大場　美代子
加須市　坂本　隆志
行田市　岩崎　薫
東筑摩郡　竹内　政男
甲州市　中村　孝子
仙台市　本郷　則子
八王子市　川村　正義
高崎市　岸　惠三郎
練馬区　鈴木　雅一
行田市　松本　信子
練馬区　追田土建開発
太田市　梅沢　敬治
相模原市　定本　京子
児玉郡　上原　一夫
みどり市　萩原　一雄
桐生市　坂田　武司
小平市　青木　勝
太田市　一ノ瀬　勝男
足立区　中山　恵司
所沢市　青木　和子
〃　丸太　敏美
港区　植杉　晴夫
高崎市　鏡　照院
国分寺市　西沢　満男
〃　新井　伊佐雄
小平市　池ヶ谷　和夫
東村山市　町田　益生
八王子市　中川　良樹
東大和市　佐久間　彰久
相模原市　田中　宜行
〃　ふみ子
下野市　島﨑　善一
戸田市　趙　栄姫
川越市　澤田　進
熊谷市　鈴木　栄司
秩父市　黒澤　茂
邑楽郡　野村　仁一
前橋市　木村　益雄
新宿区　生田　悦子
船橋市　小淵　修二
深谷市　根岸　憲司
札幌市　武田　雄二
江東区　小宮　一雄
〃　秋葉　三重子
板橋区　㈲上信堂
八王子市　吉田　利江
〃　松村　延子
〃　一般財団法人高尾保養院
八王子市　志茂　サトコ
高尾山健康登山者一同

◆お知らせ

正月から節分までの期間中は、繁忙期につき、蛇滝及び琵琶滝での滝行の指導は行いません。

ただし、通常通り個人での滝行を行うことは出来ます。

また、同期間中は大師堂での御回向や、不動院での御詠歌、月例写経会も実施されませんことを御了承願います。

人車一体交通安全祈祷

高尾山麓 自動車祈祷殿

正月御祈祷時間

元日　午前0時より午後四時まで
二日・三日　午前八時より午後四時まで
四日～七日　午前八時半より午後四時まで

尚、感染症予防対策の為、休憩室のご利用はお控え頂いております。申込書の記入は、車中にてお願い致します。

複数台をお申し込みの場合には、事前にFAXにても受け付けております。

何卒ご理解のほど、宜しくお願い申し上げます。

電　話：〇四二-六六一-一一一八
FAX：〇四二-六六一-二一三五

初詣 心のふるさと 祈りのお山 高尾山

■一月行事日程■

一日
迎光祭
元旦特別開帳大護摩供

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

六日
初甲子
（高尾山大黒天祭）

十一日、二十三日
弁天様御縁日

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

十七日
蛇滝清龍様御縁日

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

二十八日
琵琶滝不動尊御縁日
奥の院開扉供養
（十時奥之院）

二十九日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

★お知らせ
令和四年星まつり祈祷会につきまして、十二月二十一日の開白は昨年と異なり十七時となりました。

【お願い】

お正月三ヶ日は、高尾山麓の国道二十号線は混雑が予想されます。
高尾山麓の駐車可能な場所が限られておりますので、マイカーでのご参拝はご遠慮ください。

―新春大護摩奉修特別時間―

	元日（日）	2・3日（月）・（火）	4～6・21日（水）～（金）・（土）	7～9・22日（土）～（月）・（日）	10～13・29日（火）～（金）・（日）	14・15日（土）・（日）	16日以降 土曜・平日
午前	0:00						
	1:30						
	3:00						
	4:30						
	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00
	7:30	7:00					
		8:00		8:00		8:00	
	9:00	9:00	9:00	9:00	9:00	9:00	9:30
	10:00	10:00	10:00	10:00	10:00	10:00	
	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00
午後	0:00	0:00	0:00	0:00	0:30	0:00	0:30
	1:00	1:00	1:00	1:00		1:00	
	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00
	3:00	3:00	3:30	3:30	3:30	3:30	3:30
	4:30	4:00					

★正月期間中は御護摩受付所や大本堂周辺は、大変混雑致します。
お昼前後の御護摩修行には大勢の御信徒様が集中することが予想されますので、密集を避けるためにも、時間を調整しての御来山をお勧めいたします。

訂正とお詫び

十一月号十九ページ上に掲載いたしました『高尾山報助成金志納者御芳名』にて、御芳名に誤りがございました。

（正）八王子市　秋山　重男
（誤）八王子市　秋山　重夫

（正）八王子市　峰尾喜久子
（誤）八王子市　峰雄喜久子

茲に謹んでお詫び申し上げ、訂正致します。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp